

『面接と調査票のための質問構成法——社会調査の理論と実践——』

William Foddy, *Constructing Questions for Interviews and Questionnaires: Theory and Practice in Social Research*, Cambridge: Cambridge University Press, 1993, xii+228 pp.

本書の著者は、メルボルンのモナーシュ大学人類学・社会学部の上級講師である。これまでの著書に *Elementary Applied Statistics for the Social Sciences* (1988) 等がある。

本書において著者は、社会調査で用いる質問の“validity” (妥当性) をいかにして高めるのかという課題に取り組んでいる。適切でうまく解釈することができ、また比較可能なデータを集めるための調査能力を高めるにはどうしたらよいか、という点が本書の主題である。現代の社会調査においては“verbal” (口頭の) データの活用が重視されているが、刊行されている研究成果は面接テクニックやデータ分析を扱ったものが大半を占めている。それに対して本書は、面接と調査票のための質問の構成方法に焦点をあてたものである。著者は“verbal” データの質を高めるには「質問—回答行動」の本質を理解することが最善の策であるという立場から方法論を展開している。

「質問—回答行動」を重視する立場とは、まず人間のコミュニケーションは“reflexive” (反射型) なものであると捉えることが前提となる。つまり人間はお互いの“verbal” 行為を解釈するとき、他者の見解を考慮するものである。具体的には回答者の答えは、調査者が何を知りたいのか、またその答えから何をしたいかを推測したうえでなされている。それゆえ、「回答者はつねに調査者の行動解釈をなしている存在であると同時に、つねに調査者に対する自分の行動に影響を及ぼしている存在である」と捉える必要があることを示唆している。つまり、回答者は調査者の要望に反応するだけの受動的な存在なのではなくて、与えられた質問に意味を見いだそうと努力する能動的な存在とみなされるのである。

本書は、13章からなる。目次を示すと以下のようになる。

- 第1章 問題の所在
- 第2章 理論的枠組

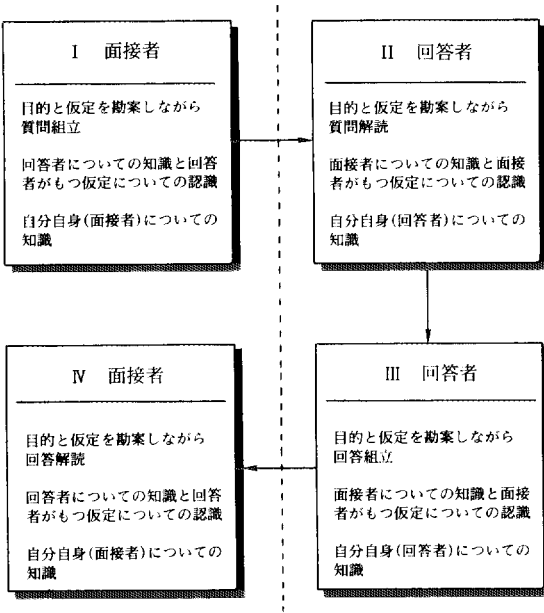
- 第3章 事柄 (トピックス) の明確化
- 第4章 情報を得るための知的収集法
- 第5章 回答者が質問を解釈する際の、文脈上の影響を考える
- 第6章 回答構造を明らかにすること
- 第7章 記憶の限界
- 第8章 フィルター
- 第9章 回答者の怖れを減らすには
- 第10章 質問、2つのタイプを検討する
- 第11章 態度の計測について
- 第12章 回答をチェックする
- 第13章 結びのコメント

導入部の第1章に続く第2章以下、第12章まで各章毎に概要を紹介していく。

第2章では、調査者が暗黙のうちに前提としている点を10項目にわたって列挙し、次章からの検討材料としている。10項目を下に示す。

- (1) 調査者は必要な情報に関する事柄を明確に定義している (回答者は同じように解釈する)。
- (2) 回答者は調査者が必要とする情報をもっている (質問は回答者にとって的を得ている)。
- (3) 回答者は調査者が望むように情報を言葉にする能力をもっている。
- (4) 回答者は調査者が意図したように質問を理解できる。
- (5) 回答者は調査者に対して必要な情報を与える意思をもっている (そのようにモチベートできる)。
- (6) 「なぜ調査者はそのような質問をするのか」について語られなかったとしても、回答者は有効な回答をする。
- (7) 調査者が回答者にヒントを与えなくとも、回答者は有効な回答をする。
- (8) 回答者の答えは、そのときの被調査環境・状況に左右されない。
- (9) 質問に対するどのような回答過程がとられても、

「質問—解答行動」に関する象徴的交互作用論者のモデル



(出所) 本書 22ページ。

回答者の信条、意見、習慣は変わらない。

- (10) ひとつの質問に対する多くの回答者の答えは、互いに意味のある比較が可能である。

本書で著者が展開するモデルでは、「質問—回答行動」を複雑な4段階コミュニケーション・サイクルとして扱う(図参照)。その前提とは「有効なコミュニケーション・サイクルが起こるためには、質問は調査者が意図したように、回答者によって解読されなければならない。次に、回答は回答者が意図したように、調査者によって解読されなければならない」というものである。

第3章から第6章までは、このモデルに従ってそうした前提がもつ問題点について再検討されている。第3章は第2章で列挙された前提のなかで最初の3つが検討対象となる。質問—回答サイクルがうまく機能するためには、調査者と回答者双方が事柄(トピック)についての理解を共有していなければならない。また、すべての事柄は多次元的なので回答者は事柄をいろいろな方法で定義する。調査者がこの点に気づいていな

い場合、回答は正確に解釈されないし、比較も適正なものにならない。著者はこうした問題への対処について言及している。

第4章で検討を加えているのは次の点である。前章で指摘されたように、調査者は自分が欲しい情報を明確にしているわけではないし、回答者もまたその情報について理解しているわけではない。調査者が望むように質問を理解してもらうためには、各単語や属性について回答者に同じ意味で使ってもらう必要があるが、それは大層複雑な問題である。このような、質問を構成する際に直面する問題を扱うのが本章である。回答者にとって理解することが容易な質問とはどのようなものが具体的に示される。

第5章では、第2章で列挙した10の前提のうち後半の4つの問題について再検討している。回答者は質問の意味を理解することに困難を覚えるとき、あらゆる手掛かりを使って理解し回答しようとする。その手掛かりとする方策の具体例が示される。しかし、回答者はそれぞれに異なった手掛かりを使って理解しようとするので、回答はバラバラになる。そのような問題にいかにして対処するかが議論される。

第6章においては、質問に対する回答のフレームワークを調査者は明確にしておくべきであるという点に言及している。同じ質問でも回答者によってさまざまな回答がよせられる。こうした多様な回答に対して調査者は、たとえばリングとミカンと比較するといったように異なるものを比較してしまうという失敗を犯しがちである。本章ではこの際の解決策を探っている。

これまでの章では、回答者が必要な情報を実際にもっているのかどうかという点から回答者の属性を検討してきた。第7章では、回答者の記憶構造そのものを検証する。調査者は回答者のもつ情報とその記憶のなかにしまわれていた時間を考慮する必要があるが、この点と並んで、記憶を正確に呼び戻してもらうための手順・方法が紹介されている。

第8章は、フィルターの問題を扱っている。フィルターとは、回答者が質問の意味を理解し、答えやすいようにする誘導的な質問のことである。“non-substantive”(非実物的)な回答選択肢が与えられていないとき(例として、「知りません」や「意見をもっていま

## — 紹介 —

せん」)、回答者の10~20歳は、“substantive”(実物的)な形態で回答する傾向がふつうみられる。つまり回答者は強要されれば適当に答えてしまう性質をもつ。こうした事実を背景に、本章ではどのようなフィルターが使われるべきか、また全体のなかでのフィルターの位置づけ等が検討される。

第9章は、質問を受ける際に回答者が抱く怖れについて検討を加えている。ここでは特定の回答者に現われる特有の「質問の怖れ」、回答者を怖れさせる質問の特徴、調査者と回答者のあいだに存在する関係の性質に関連した怖れ、被調査環境・状況の問題等から、怖れを減少させる方策を探っている。

第10章は、“opened question”(構造化されない質問形式)と“closed question”(構造化された質問形式)のあいだの論争を扱っている。2つの異なる質問形式の積極的側面、否定的側面を評価しているが、とりわけ前者に対するコーディングの問題、後者に対する選択肢作成の問題について詳しく検討を加えている。近年では、“opened question”で詳しく事前調査した後、

“closed question”による量的調査を実施することで、回答はより回答者の世界を反映した適切なものとなるといったコンセンサスが生まれているが、この点に関しても掘り下げた吟味がなされている。

第11章は、回答者の態度の計測尺度を扱っている。態度の計測にあたっては“summated rating scale”(積算格づけ尺度)がもっとも多く使われるが、それがもつ欠陥を示すだけでなく解決策も提示される。この尺度に対しての代替案として“magnitude scale”(量的尺度)が用いられるが、本書ではその問題点にも言及している。

第12章は、質問が意図したように機能したかどうかをテストする方法を扱っている。以下の3方法のうち少なくとも2方法を使うよう勧告している。1つ目は回答者自身の言葉で回答者に再唱してもらうこと、2つ目はダブルインタビュー法、3つ目は大きな声をだして回答してもらうこと。

コンピュータを使った統計分析手法がますます容易になり、調査者もついそちらに関心を傾けがちな昨今、信頼性の高いデータ集めの方法について検討を加えた本書は、きわめて価値の高い一冊である。

(斉藤千宏：龍谷大学講師)